



地獄百八景

北野勇作

さて、亡者が大勢集まった。

亡者と役者は待つのも仕事。

もちろんそれはわかっとなる。

いちどに大勢死んだとみえて、閻魔の庁は大混雑。裁きの順番待ってはみるが、まだまだまわってきそうにない。

そのうちにな。

このままこうして、ただ死んでるだけ、っちゅうのも退屈や、なあ、ひとつ皆で芝居でもやろやないか、と、そんな酔狂なこと言い出す奴が出てくる。ああ、そらなかなかええ閑つぶしや、何をやる、何がしたい、とまあ皆であれこれ相談して、ほんならまあ手近なところで、あの世の話をやったらええやないか、と誰ぞが言うた。おお、それならまわりにネタはなんぼでもころがってるわ、それになんちゅうてもホンマモンやからな、と皆、笑いながら同意した。

さあ、それから配役を決める、っちゅうことになったはよかったが、これがなかなかまとまらん。なにせ皆が皆、閻魔大王の役か、それがアカンでも、せめて鬼の役をやりたがる。そらまあ、たとえ芝居にしても、裁かれたり責められたりするよりは、裁いたり責めたりする側にまわりたいんやろな。

その気持ちはわかる。わかるけども、閻魔大王と鬼ばかりで、肝心の亡者を演る者がひとりもおらんのでは、そんなもん、何をどないやっても芝居にならん。おもしろいこともなんともあらへん。

ええい、亡者はおらんのか！

閻魔の庁の前での騒ぎを聞いて出てきたらしい閻魔大王が、業を煮やして一喝した。

もうこうなったら少々強引でも裁いてしまうしかなかろう、と、なおも揉めてる亡者どもに閻魔がこう宣言する。

亡者をやるという者は、罪の大小に関わらず、無条件で極楽に通してつかわずぞ。

ところが、誰も手を挙げへん。

そらそやな。なにせ、そんなことを約束してくれてるその閻魔大王が、ホンマモンの閻魔大王かどうかなんかわからへん。

ここに群れてる亡者のひとりが勝手に閻魔大王の役を演ってるだけかもしれん。

そんな約束、到底信用できん。いや、そもそも選挙前の公約じみたそんな無茶な約束をする、っちゅうようなもんが、ホンマモンの閻魔大王とはとても思われへん。

そう思うのも無理はないわな。

このままでは埒があかん、っちゅうところに、とりあえず後から来た連中に亡者の役をやらせたらええんとちゃうのか、と誰ぞが言い出した。もうそこにおる連中が決めるんやから、ああそらええ考えや、と、じつにあっさり話がまとまった。

けどそないなことを知ったら、後から来たその連中かて、亡者なんかより閻魔大王とか鬼の役のほうがやりたいわ、っちゅうて文句をつけるに決まってる。そやからくれぐれも、これが芝居や、っちゅうことは、内緒にしとこな。

とまあそんなわけで、ここに守秘義務というもんが発生したわけや。

もちろんあとから来た連中は、先にそこにおった連中の間でそんな取り決めができてるなんか夢にも思おてないし、ましてや、「もしかしここ、芝居の舞台として作られた偽物の地獄とちゃうか」とか、そんな疑いをいただくはずもない。そやから、亡者のままで亡者らしいに亡者の役をやらされてて、もちろん自分がそんな役をやらされてる、っちゅうことすら知りもせえへん。

閻魔大王の前に頭を垂れて、ひとりずつ神妙に裁かれていく。

けどまあ、なにせ素人芝居や。やたらと大袈裟で長い間をとる。芝居はクサなっていくし、なんぼでも長あなっていく。

もちろん、退屈や。

それでも亡者にしたら、自分が裁かれる番が巡ってくるのをただ待ってるしかない。

そのうちに、このままだここで死んでるだけ、っちゅうのも退屈やから、なあ、ひとつ皆で芝居でもやろやないか、と、そんな酔狂なこと言い出す奴が出てくる。ああ、そらなかなかええ閑つぶしや、何をやる、何がしたい、と皆であれこれ相談して、ほんならまあ手近なとこで、とおなじ運びになって、ごじゃごじゃあって、それで、またひとつ偽物の地獄ができあがる、っちゅう段取り。

じつは、もうずううううっと前からこういうことが続いてて、おかげで亡者はいつまでたっても本物の地獄にたどり着けへん。

幾つ目かの地獄で、さすがにそのことに気がつくわ。なんやねんこれ、いったいどないなってんねん、と、ええかげん嫌んなって立ち止まる。

で、振りかえって、自分が来たここまでの道のりを目で遡ってみるわな。

さあ、そこで初めて、死ぬ前に自分が現実やと思ひ込んでたあの場所も、じつはあの世に作られた舞台のひとつでしかなかったんや、っちゅうことに気がつく。

そんなとき、亡者は決まってこんなこと言うらしいわ。

ほんなら、このおれは、いつ、どこで死んだんやろ？

地獄百八景

<http://p.booklog.jp/book/64160>

著者：北野勇作

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitanoyuusaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64160>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64160>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ